

上智大学・ベネッセ応用言語学シンポジウム

新課程直前・高校英語 「授業は英語で」を考える

— 何のために、どのように行うのか —

英語の「授業は英語で行うことを基本とする」。こう謳われた高校の新学習指導要領の全面实施の日が迫る中、2012年12月2日(日)、高校教師を中心とする教育関係者を対象に、英語による授業の狙いと課題、方法などについて考えるためのシンポジウムが開かれた。その内容を紹介する。

生徒の自己表現力・対話力を育成するために

本シンポジウムは4つのプログラムから成る(図1)。

プログラム1では、上智大言語教育研究センター教授の吉田研作先生と慶應義塾大環境情報学部教授の田中茂範先生が、グローバル化が進む現代の英語教育に何が求められるかについて対談した。田中先生は、多様な価値観を持つ人々と意思を疎通できるように、英語による生徒の自己表現力と対話力を伸ばすことが重要であると強調。吉田先生も同意し、英語教育の目的とは、単に知識を教えたり、学んだりすることではなく、

それを活用できる力を付けることであると語った。

プログラム2では、文部科学省教科調査官の向後秀明先生が、英語で授業を行うことの狙いを説明。生徒の思考力、判断力、表現力を伸ばすために、英語による言語活動を充実させてほしいと訴えた。

プログラム3では、群馬県教育委員会指導主事の津久井貴之先生が、群馬県内の公立中等教育学校で自身が指導した英語による授業の様子を紹介。各単元で生徒に付けさせたい力に応じて教材をアレンジすることの重要性を話した。また、授業改善の方法として、自分の授業をビデオで撮影し、見返すことを推奨した。

図1 シンポジウムのプログラム

| | |
|-------------------|--|
| ◎プログラム1 対談 | <p>新課程・高校英語「授業は英語で」その先にあるもの — これからの時代、子どもたちに求められる力とは</p> <p>上智大言語教育研究センター教授 吉田研作先生 慶應義塾大環境情報学部教授 田中茂範先生</p> |
| ◎プログラム2 講演 | <p>「授業は英語で」なぜ行うのか — 生徒・教師は教室でどのように変わるのか</p> <p>文部科学省教科調査官 向後秀明先生</p> |
| ◎プログラム3 実践事例紹介 | <p>「授業は英語で」どのように行うのか — 3年間の見通し方、単元のつなぎ方、1時間の作り方</p> <p>コーディネーター/ 東京外国語大大学院総合国際学研究院教授 根岸雅史先生 事例紹介/群馬県教育委員会指導主事 津久井貴之先生 コメンテーター/ 東京外国語大世界言語社会教育センター専任講師 長沼君主先生</p> |
| ◎プログラム4 検討 | <p>「授業は英語で」行う上での課題について考える — 「英語教師50人に聞きました」からみてきたもの</p> <p>コーディネーター/上智大言語教育研究センター教授 吉田研作先生 パネリスト/ 松山大人文学部教授 金森強先生 青山学院大文学部教授 アレン玉井光江先生 群馬県教育委員会指導主事 津久井貴之先生 東京外国語大大学院総合国際学研究院教授 根岸雅史先生</p> |



授業は基本的に英語で行う

本シンポジウムに先立ち、ベネッセコーポレーションが高校の英語教師50人を対象に、英語による授業のどのようなことに不安を感じるのかをヒアリング調査したところ、多くの教師が次の3つの不安を挙げた。

① 英語が苦手な生徒は英語だけで理解できるか

② 大学入試に対応できる学力を付けられるか

③ 文法は日本語で説明しないと生徒は理解できないのではないか

「突然授業が英語で始まったら、生徒は戸惑わないか」といった質問も多く上がった。これに対して、津久井先生は次のように答えた。

「教師が生徒に『日本語でもいいよ』と言うのは禁句であると、私は考えています。『日本語でも英語でもよい』となると、生徒は英語を使おうとしないからです」

コーディネーターとしてプログラム4に携わった吉田先生も、津久井先生に賛成した。

「英語で授業を組み立てるという大原則は変えずに、どう考えても日本語で指導した方が効果が上がるものについてのみ、日本語を限定的に使うことも考えられるでしょう」

「突然授業が英語で始まったら、生徒は戸惑わないか」といった質問も

「これまでは大学入試に合格する力を付けることを指導のゴールと考えていました。しかし、今日のシンポジウムに参加したことで、入試だけにどまらず、大学入学後を見据え、自分が生徒にどのような力を付けさせたいかというビジョンをつくることこそ必要だと痛感しました」

図2 英語で授業を行う上での3つの不安とその検討

| 不安① 英語が苦手な生徒は英語だけで理解できるか | |
|----------------------------------|--|
| 回答者 | 松山大人文学部教授 <small>かなもりつよし</small> 金森 強先生 |
| 回答 | ただ授業を英語で行うだけではなく、英語や英語学習に対する生徒の興味・関心を高める必要がある。そこで鍵となるのは、「can-doリスト」を生徒の実態に応じて作成することである。先生方には、生徒にどのような力を付けさせたいかを考え、そこから逆算してカリキュラムや教材を決めていただきたい。また、生徒に英語で何かを表現したいと感じさせることも大切である。そのため、他教科と連携し、生徒の知的好奇心を高める仕掛けをつくっていくことが求められる。 |
| 回答者 | 青山学院大文学部教授 アレン玉井光江先生 |
| 回答 | 生徒の英語力を伸ばすために重要なことは2つあると、私は考えている。1つは、文脈の中で英語を理解させること。もう1つは、日本語でのコミュニケーション能力を鍛えることである。私は小学校の外国語活動の授業に指導者としてかかわっているが、そこでもこの2つの重要性を実感している。先生方には、英語ばかりでなく、日本語で表現する力を伸ばすことも大切にいただきたい。 |
| 不安② 大学入試に対応できる学力を付けられるか | |
| 回答者 | 群馬県教育委員会指導主事 津久井貴之先生 |
| 回答 | 授業で徹底して生徒の英語による表現力を高めていけば、入試問題は解けるようになる。私は、授業で学習したことを定着させるためには復習が大切だと考え、生徒に復習のためのノートをつくらせ、定期的に提出させていた。ただ、生徒には復習する内容を自分の目標や課題に応じて自由に決めさせていた。これにより、生徒の学習内容や方法の理解は深まり、復習に対する生徒の意欲も伸ばすことが出来たと感じている。 |
| 不安③ 文法は日本語で説明しないと生徒は理解できないのではないか | |
| 回答者 | 東京外国語大大学院総合国際学研究院教授 <small>まさし</small> 根岸雅史先生 |
| 回答 | 一口に文法の説明といっても、言語形式などの説明と、その文法形式の概念、つまり文法形式の表す意味の説明がある。後者は、日本語で行うよりも英語で行った方が生徒には分かりやすいと、私は考えている。また、文法の説明といった時に大事なものは、後者の文法形式の意味を伝えることではないか。 |

「これまでは大学入試に合格する力を付けることを指導のゴールと考えていました。しかし、今日のシンポジウムに参加したことで、入試だけにどまらず、大学入学後を見据え、自分が生徒にどのような力を付けさせたいかというビジョンをつくることこそ必要だと痛感しました」

ARCLE®
ARCLE (アークル) :
Action Research Center for Language Education

ARCLEはベネッセ教育研究開発センターが運営する英語教育研究会です
 * 今回のシンポジウムに関する詳細は、2月下旬に下記ARCLEのウェブサイトでご覧いただけます。
 ▶ <http://www.aracle.jp/>
 → トップ > 研究ノート・研究会レポート